

小宰相身投考

原 はら
田 だ
敦 あつ
史 し

一

一の谷の敗戦後、夫である平通盛の死の報に絶望した小宰相は、屋島へ渡る船上、その苦悩を乳母に向かって打ち明ける。彼女の胸のうちに去来したのは、通盛との最後の逢瀬となった夜のことだった。

あすうちいでんとての夜、あからさまなところにてゆきあひたりしかば、いつよりも心ほそげにうちなげきて、「明日のいくさには、一ぢやううたれなんずとおぼゆるはとよ。我いかにもなりなんのち、人はいかゞし給ふべき」などいひしかども、いくさはいつもの事なれば、一ぢやうさるべしとおもはざりける事のくやしさよ。それをかぎりとだにおもはましかば、などのちの世とちぎらざりけん、思ふさへこそかなしけれ。たゞならず成たる事をも、日ごろはかくしていはざりしかども、心づよおもはれじとて、いひいだしたりしかば、なのめならずうれしげにて、「通盛すでに三十になるまで、子といふもののなかりつるに、あはれなんしにてあれかし。うきよのわすれがたみにもおもひをくばかり。さていく月ほどになるやらん。心ちはいかゞあるやらん。いつとなき波の上、舟のうちのすまひなれば、しづかに身々とならん時いかゞはせん」などいひしは、はかなかりけるかねごとかな。まことやらん、おんなはさやうの時、とをにこゝのつはかならずしぬるなれば、はぢがましきめを見て、むなしうならん

も心うし。しづかにみみとなつてのち、おさなきものをもそだてて、なき人のかたみにもみばやとはおもへども、おさなきものを
 みたたびごとには、むかしの人のみこひしくて、おもひの数はつもと、なくさむ事はよもあらじ。ついにはのがるまじき道也。
 もしふしぎにこのよをしのびすぐすとも、心にまかせぬ世のならひは、おもはぬほかのふしぎもあるぞとよ。それもおもへば心う
 し。まどろめば夢にみえ、さむればおもかげにたつぞかし。いきてあてにかくに人をこひしとおもはんより、たゞ水の底へいら
 ばやとおもひさだめてあるぞとよ。

引用したのは、語り本系『平家物語』のうち、高野本の「小宰相身投」の本文である。^①このあと、乳母の懸命の説得もむなしく、小
 宰相は海に身を投げることになるのだが、本稿では、その入水に先立つ右の告白に注目してみたい。小宰相にとって最後の夜の記憶は、
 「それをかぎりとだにおもはましかば」という後悔とともにあるものだった。あのときが最後だとわかつていたなら、「のちの世」での
 再会を契っていたのに、それができなかった。通盛は、明日の戦で命を落とすことになる予感がすると言っていたのに、「いくさはい
 つもの事なれば」、いつしか自分の感覚は麻痺していたのかと、小宰相自身がそう語っている。

小宰相が、通盛の不安を受け止めてやれなかったのだという点に着目されることは少なくない。だが、もし「それをかぎりとだにお
 もはましかば」、彼女は「のちの世」を契る言葉を口にしていたのだろうか。松尾鞆江氏による、次のような読解を重視したい。

夫が「明日は死ぬような気がする」と言ったとき、「後の世にも必ず」と契るべきだった、と彼女は後悔するが、それは事態がす
 べて判つてからの後悔であつて、相手が死の予感を口にしたときに、「そうですか、それなら……」とは、かけがえのない間柄だ
 からこそ言えないものである。処刑の前夜ならともかく、戦死の予感を肯定したならばどうなるだろうか。^②

小宰相にとって、後の世を契ることは、「明日のいくさには、一ちやううたれなんぞとおほゆる」という通盛の予感を肯定してしまう
 ことであつたにちがいないのである。そんな言葉を、口にできたはずがない。大切な人が死の予感を打ち明けたとき、それをそのまま
 受け入れることなどできるわけがない。たとえば、平重衡の処刑前、妻大納言佐とわずかな面会が許された、その最後の場面を見よう。

（重衡）「契あらば後世にてはかならずむまれあひたてまつらん。ひとつはちすにといのり給へ。日もたけぬ。奈良へも遠う候。武
 士どものまつも心なし」とて、出給へば、北方袖にすがって「いかにやいかに、しばし」とてひきとゞめ給ふに、中将「心のうち
 をばたゞをしはかり給べし。されどもつゐにのがれはつべき身にもあらず。又こん世にてこそ見たてまつらめ」といで給へども、

まことに此世にてあひ見ん事は、是ぞかぎりとおもはれければ、今一度たちかへりたくおほしけれども、心よはくてはかなはじとおもひきつてぞいでられける。北方御簾のきはちかくふしまるび、おめきさげび給ふ御声の、門の外まではるかにきこえければ、駒をもさらにはやめ給はず。³（覚一本卷十一「重衡被斬」）

重衡は、処刑の地へ護送される途中である。その死は、通盛と小宰相の場合よりもさらに、確度の高いものだった。最後の対面であることはあまりにも明白である。けれども大納言佐は、ここでは後の世のことなど祈っていない。「ひとつはちすにといのり給へ」と言われても、決して避けられない別れが目の前にあることを受け入れられず、ただ涙に暮れるだけなのだ。

まして小宰相にとっては、通盛が生還する可能性は捨てきれぬものではなかったにちがいない。死の予感を告げる通盛の言葉を、そのまま受け入れられたわけではない。そのときに彼女ができたことは、彼の言葉の不吉さをなんとか打ち消そうとすること以外にあるまい。妊娠を打ち明ける小宰相の言葉は、まさにそのために発せられたもののように思われる。松尾氏はさらに、

「死なないで下さい」とか「貴方が死ぬはではありません」と言う代りに、自分の妊娠を打ち明けたということではないか。「日ごろはかくしていはざりしかども、心づようおもはれじとて」打ち明けた、という彼女の述懐が、夫の不安をただ聞き逃したのでないことを示している。その時は、夫の不安を逸らす最も有効な言葉として妊娠を口にしたはずだ。⁴

とも言われているが、それは同時に、自身の心中に生じてしまった不安をかき消そうとすることでもあっただろう。この点に関わって、「心づよおもはれじ」という一言に、少しこだわってみよう。一体なぜこの場面で、気が強い女だと思われたくないという思いが彼女を動かしたのだろうか。唐突とも思えるこの表現が納得のいくものとなるのは、おそらく彼女の入水の後、物語が二人のなれそめを記す部分においてである。通盛が小宰相を見初めたことが二人の仲の始まりであったが、三年の間送りつづけた通盛の手紙に、小宰相は全く応えようとしなかった。思い詰めた通盛が、これを最後と送った手紙が、小宰相が仕える女院の目にとまる。

「あまりに人の心づよきもなか／＼いまはうれしくて」なんと、こま／＼とかひて、おくには一首の歌ぞ有ける。

我こひはほそ谷河のまろ木ばしふみかへされてぬる、袖かな

女院、「これはあはぬをうらみたる文や。あまりに人の心づよきもなか／＼あたとする物を」。

こうして、女院のなかだちによって二人は結ばれた。女の心強さを戒める女院の言葉とともに、二人の関係は進んだのである。このと

き以来、小宰相は通盛の前では常に「心づよふおもはれじ」と意識してきたのではなかったか。⁵最後となった逢瀬でも、彼女はそうに振る舞おうとしていたのだ。別れが目前にあることを、認めることなどできない。だからといって黙っていたり、ただ月並みな言葉で否定するだけだったりすれば、また気の強い女だと思われてしまう。今このとき、そうした思いとともに妊娠を打ち明けたのだとするならば、それは、今までの二人の関係がこれからも続いていくことを願う言葉に他ならなかったはずだ。不吉な未来に対して彼女ができる、それが精一杯の抵抗なのである。

だが結局、通盛は帰らず、後の世を契ることのなかった後悔だけが残った。それは、言えたはずのない言葉だ。言えたはずのない言葉でも、後になれば言わなかった悔いしか残っていない。もし言えていたらどうだったのか。いま「いきてゐてとにかく人にこひしとおもはんより、たゞ水の底へいらばや」という絶望の淵にある小宰相にとつて、もし「のちの世をちぎ」ることができていたなら、それは彼女がこれから生きつづけていくための、せめてもの支えとなったのではないか。今はもうそのように思うしかないからこそ、言えたはずのない言葉だとわかつていたとしても、言わなかった後悔が彼女を苛むのだ。小宰相にとつての「契り」の意味、そしてそれを言わなかったことの意味を、以上のように整理しておきたい。

二

高野本をめぐって、小宰相入水に先立つ苦悩の告白に着目してきたのは、それをもとに他の『平家物語』諸本との対比を行ってみたためである。他諸本の中には、異なる描き方をするものを見出すことができる。まずは延慶本を挙げておきたい。延慶本を含めた読み本系諸本は、語り本の場合と違い、二人のなれそめを語るところから小宰相の物語を始発させ、その後に入水前の姿に焦点をあててゆく。⁶最後の逢瀬を振り返る小宰相の言葉は、延慶本では次のようになっている。

アワレ、此人ノアス打出ムトテハ、世中ノ心細キ事共ヲ終夜云ツケテ、涙ヲ流シカバ、「イカニカクハ云ヤラム」ト心サワギシテ覚シカドモ、必ズカ、ルベシトハ思ハザリシニ、限ニテ有ケル事ノ悲サヨ。「我イカニナリナム後、イカナル有サマニテ有ムズラムト思モ心苦シ。世ノ習ヒナレバ、サテシモアラジ。イカナル人ニ見エムズラムト、ソレモ心ウシ」ナムト云シ時ニ、タッナラ

ズナリタル事ヲ、其夜始テシラセタリシカバ、ナノメナラズ悦、(中略。通盛の喜び)只今有ムズルヤウニ歎給シ物ヲ。ハカナカリケルカネ事カナ。軍ハイツモノ事ナレバ、ソレヲカギリ最後トハ思ワズアリシ。六日ノ晝ヲ限トシリセバ、後ノ世ニトモ契テマシ。誠ヤラム、女ハ身々トナル時、十二九ハ死ルナレバ、カクテ恥ガマシキ目ヲ見テ、トモカクナラム事モ口惜シ。若此世ヲ忍過テナガラヘテモ有バ、心ニ任セヌ世ノ習ナレバ、不思議ニテ、思フヌ外ノ事モ有ザカシ。心ナラズサル事モ有バ、草ノ影ニテ見ム事モハヅカシケレバ、此ノ世ニナガラヘテモナニカハセム。マドロメバ夢ニミヘ、サムレバ面影ニタツゾトヨ。サレバ此次ニ、底ノミクゾトモ思入テ、死出山、三途川トカヤヲモ、同道ニトノミ思ガ^⑦：

こんなことになるなんて思っていなかった。「六日ノ晝ヲ限トシリセバ、後ノ世ニトモ契テマシ」という後悔を、ここでも小宰相は抱えている。だがその文脈は、高野本とは異なるようである。生前の通盛の言葉に注意したい。

通盛は、高野本のように漠然と死の予感を訴えていたわけではない。はつきりと、「イカナル人ニ見エムズラムト、ソレモ心ウシ」と口にしていたのである。自分が死んだら、やがて小宰相は誰かと再婚してしまうのではないか。その懸念を、通盛は強く訴えている。再婚は「世ノ習ヒ」であったとしても、彼にとっては「心ウ」きものなのだ。そう訴える通盛に対して、小宰相が後の世でも一緒なのだ^⑧と契る言葉をかけてやっていたとしたら。それは通盛の気がかりを、打ち消してやる言葉となつたはずではなかったか。私がいなくなつたら、お前は誰か別の男のものになつてしまうのか。いいえ私たちはずっと、後の世までも一緒なのですと。

それは、言つてあげてもよかつたはずの言葉だ。ただ死の予感を言う相手に、後の世までも一緒ですなどと返すのとは違う。あなたが私を思ってくれるように、私もあなたのことを思っている。他の誰でもなくあなたと来世まで一緒にいたい、私も同じ気持ちなのだ。だから余計なことは気にせずにちゃんと戦つて、また生きて帰つてきてと。延慶本の「契リ」は、高野本に比べればずっと、言つてあげられ^⑨たはずの言葉だったのであり、そうであるがゆえに、それを言わなかった後悔が小宰相を苦しめているのである。

物語をさかのばれば、自分の死後はすみやかに再婚せよと妻にすすめた、維盛のような男もいた。平家の都落に際し、維盛は北の方に

世ニナキ者ト聞ナシ給トモ、アナカシコ、サマナムドヤツシ給ナ。イカナラム人ニモミヘ給ヒテ、少キ者ドモヲモハグ、ミ、我身ノ後世ヲモ助給ヘ。サリトモナドカ、「アワレ、イトヲシ」ト云人モナカルベキ。

と告げ、妻子を同道することはなかった。それも相手の人生を思えばのことである。なぜ通盛は、そうまで小宰相の再婚を嫌がったのか。それを明かすために、二人のなれそめ譚は入水譚に先立って置かれている。上西門院の花見に供奉したときに見かけた小宰相の美しき、それ以来恋の病に臥した通盛が、乳母の六条に訴えた苦しみ、手紙を送り続けた三年間、これを最後に出家する覚悟で送った手紙が女院の目にとまり、二人が結ばれるまで。本文の引用は避けるが、それは高野本よりはるかに長大な恋の物語である。通盛にとつて小宰相は、長く思い続けた苦しい恋を経てようやく手に入れることのできた恋人だったのだ。それほどまでに思いをかけていた女だからこそ、たとえ自分が死んだ後でも、他の男のもとへ行つてほしくはない。そう訴える通盛に、私たちは来世までも一緒にのだから、言葉をかけてあげていたなら。黄泉路に行く通盛の気がかりを、せめて少しでも減らしてやれていたのではないか。

延慶本では、「契り」は第一に、男の心の支えとなるべき言葉だった。だが小宰相はそれを言うことなく、妊娠を打ち明ける。来世までのつながりを約束するより、現世で二人をさらに結びつける新たなものの存在を告げる方を選んだ。それもまた、通盛に生きて帰つてきてほしいという思いゆえのことである。けれど、あの逢瀬が最後だとは思わなかった。「軍ハイツモノ事ナレバ、ソレヲカギリ最後トハ思ワズ」、彼の望む言葉をかけてやれなかった。もはや言葉は届かない。ならば行動で示すしかない。私が生き延びて再婚する姿を、通盛が「草ノ影ニテ見ム事モハヅカシケレバ」。延慶本の文脈では、これが小宰相が入水を決意した最も直接的な理由なのだった。

三

右に見てきたように、高野本、延慶本はともに、「あのときが最後だとわかつていたなら後の世を契つたのに」という小宰相の後悔に焦点をあてながら、その描く世界は一樣ではない。普通の夫婦が普通の日常の中で交わしていてもおかしくないような約束が、特別な意味と重みを持つてゆく様を描き出し、それぞれにすぐれた達成を示していると思う。ところが、他の読み本系諸本に目を広げてみると、「あれが最後だとわかつていたら」とも、「契つたのに」とも描かないものがある。

明日打出でんとせし夜、白地なる処へ呼びしに、行き合ひたりしかば、心弱き事共物語して、「明日の軍には、生きて返るべしと

は覚え。我、何かにも成りたらば、人は何かゝ為たまふべき。世の習ひなれば、何かなる人にも具してこそ御在すらめ。誰に具し御在すとも、我を忘れたまふなよ」と云ひし物を。日比は恥づかしかりしかば云はざりしかども、心弱気に云ひし時なれば知らせんとて、「我が身も只成らぬよ」と云ひしかば、喜しき事を知らせたりと思ひ氣にて（中略。通盛の喜び）と歎きたまひしも、由無き兼事かな。人々皆躰を替へたまふと聞けども、躰を替へたりとても忘るべしとも覚え。世に在らんに、亦心ならぬ事も有るぞかしと思へば、只水の底へも沈みなんと思ふ」と言ひけり。（四部合戦状本）

明日打出ントテノ夜ハ、アカラサマナル所ニテ行相タリシカ、世ニ心弱ケニ物ヲ云シナリ。此度ノ軍ニ死スルヤ覽、イツヨリモ心弱ク覺ユルナリ。若サモ有ハ、如何カシ給フヘキ。世ノ常ノ習ナレハ、如何ナル人ニモ具足シテコソ過給ハンスラメ。誰ニ具ス共、我事忘給ハテ後世訪テタヒ給ヘヨ、ト云シコトコソ忘難ケレ。日比ハ恥カシカリシカハイワサリシカ共、心弱ケニ有シカハ知セント思テ、身モタ、ナラヌソヨト云タリシカハ、世ニウレキキ事ヲ聞タル様ニ思テ（中略。通盛の喜び）打歎カレシ兼事コソ、イツノ世マテモ忘難ケレ。皆人ハ男ニオクレテサマヲカフト云トモ、サマヲカヘタリトテモ忘ルヘシトモ覚え。甲斐ナキ命長ヘテ、イツマテトテカ歎クヘキナレハ、只水ノ底ヘモ沈ミナハヤト思ナリトソ宣ケル。（南都本）

ここでも小宰相は、一の谷合戦の直前、最後の逢瀬となった通盛との夜のことを思い出して語っている。通盛が小宰相の再婚を気にしているという点で、延慶本との共通性を見することもできる。だが、四部本や南都本において、物語は、あれが最後だとわかっていたら契つたのに、という小宰相の思いへと焦点化していかない。それどころか、『源平闘諍録』にいたっては、妊娠を打ち明ける場面で、小宰相は

日来は恥づかしさに云はざりしかども、今を限りと思ひしかば^⑪：

とさえ言っている。こうした諸本と比べると、「あれが最後だとわかっていたら」「契つたのに」という一点に焦点をあわせた構成をとる延慶本や高野本のような物語が、いかに劇的によく構成されているかがわかる。それゆえに、そうした要素を有さない諸本の方が、古朴な形を伝えているのではないかと想像される。^⑫「あれが最後だとわかっていたら」「契つたのに」というのが、諸本の流動の中で後から持ち込まれた趣向であるとすれば、それを延慶本や高野本が、それぞれによく活かしているということなのだろう。^⑬

四

ここまでの検討を踏まえて『源平盛衰記』に目を移してみると、かなり特異なものに見えてくる。盛衰記における小宰相の物語の問
題点を、冒頭のなれそめ譚から順に拾い上げてみる。

なれそめ譚を入水に先立つて描くことは、延慶本や長門本、四部本などの読み本系諸本と同様である。その内容や表現、分量の多寡
は諸本によってまちまちだが、通盛が小宰相を見初め、長いアプローチを経てようやく女院の仲介で結ばれるという大筋は同じである。
また、盛衰記と延慶本のみ、なれそめ譚に続けて中国の慎夫人の故事を置いている。これらについて、いま重要なことを松尾葦江氏の
考察によって示せば、次のようになる。

延慶本・盛衰記には、本妻と妾のけじめを示す漢の慎夫人説話があり、これは通盛が小宰相と船を同じうしなかった理由を説明す
る故事であるが（中略）贈答歌が二首ずつであることや、見そめのきっかけを上西門院の花見とすること、通盛の恋慕の記述が、
盛衰記は簡略ではあるが延慶本に最も近いことなど、延慶本と盛衰記とに特別の関係があったことが推定できる。¹⁾

いちいちの本文引用はしないが、盛衰記と延慶本との間に近さを認めることができるということ、重視しておきたいのである。その
ことを踏まえて、次の記述に着目する。通盛と小宰相が結ばれたことを記した直後の一節である。

仙宮ノ玉妃、天地ヲ兼テ契ケン、深キ志モ床敷テ、雲上ノ御遊ニモ、今ハス、マシカラヌ程ノナカラヒ也。角テ馴ソメ給テ日比ヘ
ケルニ、通盛、或女房ニ心ヲ移シテカレ、ニ成ケレバ、小宰相局、角ゾ怨ヤリ給ヒケル。

呉竹ノ本ハ逢夜モ近カリキ末コソ節ハ遠ザカリケレ

本ヨリ悪カラザリケル中ナレバ、通盛此文ニメデ給、互ニ志浅カラズシテ、年比ニモナリ給ヒケレバ、是マデモ具シ下リ給ケリ。
他に見られない、特異な内容である。類似する記述を他諸本に探そうとすれば、延慶本（長門本も同じ）の

仙宮ノ玉妃、天地ヲ兼テ契ヤ深カリケム、心ヤユカシクイサギヨカラマシノ心ニテ、切ナル事ノミゾオホカリケル。世ノ常ノ夫ノ
思ヲヌラウチ歎テ、悔事ナムドコソアレ、是ハ常ニ物思ガホニテ、雲上宮中ノ御遊モ倦思給ケルニヤ。ヤサシカリシナカラヒナリ。

カクテナレソメ給テ、年来ニモナリニケレバ、互ニ御志浅カラズ被_レ思タリケレバ、父、母、シタシキ人々ニモ離レテ、是マデオワシタリケルニヤ。

を挙げるしかない。おそらく盛衰記は、こうした本文を基に改作を施したのだと思われる。問題はその内容で、文章に難解などころはあるものの、およその文意としては、盛衰記は延慶本と正反對とさえ見える。延慶本は、こうして結ばれた二人だからこそ固くつながっていたとする。だが盛衰記では、ひとたび結ばれた後の二人の仲は良好であったと言った直後に、通盛が他の女に心を移したと語るのである。必死で思い続け、ようやく恋を实らせたというなれそめ譚との落差は著しい。一体なぜ通盛は浮気などしたのか。いや、一体なぜ盛衰記は、こんなことをわざわざ書くのだろうか。松尾氏は、「盛衰記のゴシップ好みが目立つ」⁽¹⁶⁾ 記事とし、それは確かに盛衰記の他の部分にも見られる性格であるが、ここでは後述の身投げに先立つ告白部分との関連から、それ以上の問題を認めたい。

慎夫人説話を挟んで、盛衰記は次のように続く。

越前三位通盛モ、此事ヲ思知給ケルニヤ、大臣殿ノ御娘ハ妻室也、夫婦ノ契ニオハシケレバ、小宰相局ハ仮染ノ昵也、妾ニテゾマシ_レケル。一ツ御舟ニハ住給ハデ、別ノ船ニ宿シ置奉、三年ノ程波ノ上ニ漂、時々事ヲ問給ヘリ。中々情ゾ深カリケル。軍ヨリ⁽¹⁶⁾先二三草山ノ仮屋ヘ奉_レ呼給ケリ。旅ネノ空ノ草枕ヲ、今コソ最後ト知給ヘ。

そして小宰相は、通盛死の報に接して悲しみに沈む。

アス打出ントテノ夜ハ、終夜イツヨリモ心細事ドモヲ云繼テ涙ヲ流ツ、「イカニモ我ハ明日ノ軍ニ討レンズルト覚ユルゾ。去バ後ニイカナル有様ニテカ、世ニモオハセンズラント思コソ心苦ケレ。世ノ習ナレバ、サテハヨモオハセジナ、何ナル人ニカ見え給ハンズラン、ソモ心憂」ナド云シカバ、イカニ角ハ宣ヤラント、心騒シテ覚エシカドモ、必シモ懸ベシトハ思ハザリシニ、ゲニ限ニテ有ケル事ノ悲サヨ。生テ物ヲ思フモ苦シケレバ、水ノ底ニモ入ナント思也。是マデ付下テ、一人残居テ思ハン事コソ糸惜ケレ。故郷ニ待聞テ歎給ハンモ罪深ケレドモ、此世ニナガラヘテ有ナラバ、心ノ外ノ事モ有ザカシ、ナキ人ノ魂、草ノ陰ニテ見ンモウタテカルベシ。何ナル男ナレバ、蓬ガ杣ニモ後レジトハ契ケルゾ、何ナル女ナレバ、ツレナク残居テ歎ベキゾ。タ_ッナラズ成タル事ヲ、其夜始テ知セタリシカバ、不_レ斜悦テ（中略。通盛の喜び）只今アランズル事ノ様ニ歎シゾヤ。ハカナカリケル兼言哉、中々何シニ知セケン」トテ：

思い出すのは、通盛との最後の逢瀬のこと。戦はいつものことだから、あれが最後とは思わなかった。通盛が再婚を嫌がっていたこと、今それを思い出した小宰相が、「ナキ人ノ魂、草ノ陰ニテ見シモウタテカルベシ」と述べる¹⁷こと、ここでも盛衰記と、延慶本との近さを見出すことはできる。その一方で、すでに松尾葦江氏による整理があるように、闘諍録との間にも共通性が見られることにも注意したい。たとえば、盛衰記と闘諍録は、小宰相の告白に先だって、乳母子が慰める言葉を置く。

乳母子也ケル女房ノ只一人奉^レ付タリケルモ、同枕ニ臥沈タリケルガ、涙ヲ押ヘテ申ケルハ、「今ハイカニ思召共甲斐アルマジ、御身タトナラセ給テ後、御サマヲモ替、後世ヲモ弔進セサセ給ヘ。懸ル浮世ノ習ナレバ、始テ驚思召ベカラズ。御身一ノ事也共イカハセシ、人々ノ北ノ御方モ皆角コソ」ナド慰申ケレ共、只泣ヨリ外ノ事ナシ、返事ヲダニモシ給ハズ。

この盛衰記の本文とほとんど重なる記述を、闘諍録も有している。このときには反応を示さなかった小宰相が、四、五日後、同じ乳母子に向かつて、通盛の死をもちや疑えないこと、自身は身を投げる覚悟であることを打ち明けるのである。その言葉のうち、盛衰記に「何ナル男ナレバ、蓬ガ杣ニモ後レジトハ契ケルゾ、何ナル女ナレバ、ツレナク残居テ歎ベキゾ」という、延慶本（長門本）には見出すことのできない、やや難解な文言についても、

何なる男なれば生きての別れを悲しみ、何なる女なれば男に後れて頼無かるべき。

という闘諍録との類似を認めてよいだろう。なれそめ譚では延慶本との間に共通性が認められたのに加えて、続く文脈では闘諍録との類似も見出すことができる。盛衰記は、明らかに複数の本文を接合したような跡を見せているのである。

そして肝心なのは、そうして作られた本文の中に、「あれが最後だとわかっていたら」「契ったのに」という表現が含まれていないことである。小宰相は、「必シモ懸ベシトハ思ハザリシニ、ゲニ限ニテ有ケル事ノ悲サヨ」とは言っている。それは、闘諍録や南都本・四部本など、第三節で取り上げた諸本には見出すことのできない表現である。そうでありながら、契りをしなかったことへの後悔の言葉を、盛衰記の小宰相が口にするのではない。「あのときが最後だとわかっていたら後の世を契ったのに」という一点に比重を置いた構成をとる、延慶本のような本文を、おそらく盛衰記作者は見ていたはずである。それでもなお、そうした描き方をすることを採用しなかったのだ。

契りをしなかったこと、取り返しつかないその一点の後悔に苛まれて小宰相は入水する。そのように描くことを、敢えて盛衰記は避けているようなのである。だとすれば、彼女はなぜ身を投げたのか。「生テ物ヲ思フモ苦シケレバ、水ノ底ニモ入ナント思也」。盛衰記におい

ては、入水の決意はこのように記される。⁽¹⁸⁾「あれが最後だとわかっていたら」「契つたのに」と描く本文の存在を知らながら、そう書くことを避けたのが盛衰記の手法であつたとするなら、そこには前述した通盛浮気の場面と通底するものを認めることができるのではないか。

通盛は、ようやく手に入れた恋人を差し置いて、別の女に心を移した。男心などそんなものなのだということを、盛衰記はよく描いていると言われればその通りである。けれども、その後のことにも注目しておきたい。小宰相は「呉竹ノ本ハ逢夜モ近カリキ末コソ節ハ遠ザカリケレ」の歌によって、通盛の心を取り戻した。そうして、二人の関係は一度の浮気で壊れることなく、「互ニ志浅カラズ」、都落にも同伴し、三年の船上生活の間も愛情を通わせあい、戦死する前の夜にも「三草山ノ飯屋」へ呼び出すほどの間柄であつたと、盛衰記は記していたのである。

小宰相と結ばれるまでの通盛の熱情は、浮気の時にはもう冷めていたのだろう。それでも、二人の関係は壊れなかった。一時の激情はいつか冷める。ならば、その後まで二人を結びつけていたのは、別の何かだ。その後の日常、そして都落以後の困難な日々を送る中で培われた情愛。それこそが、最後のときまで二人を繋いでいたということではなかっただろうか。

小宰相の死の決意を描く場面も、また同様であるように思われるのである。あのとき契つていたらという後悔の激しさ、それを描く文学が、人の胸を打つことは間違いない。それでも盛衰記は、「生テ物ヲ思フモ苦シケレバ、水ノ底ニモ入ナント思也」と描く。大切な人を失つてなお生き続けなければならない日常のほうにこそ、本当の苦しみを見出しているようである。一時の激情はいつかは冷める。そのあとの日常の中にこそ、人と人との本当のつながりも、また苦しみもあるのだと、盛衰記は描こうとしているように感じられるのである。盛衰記は、そのような形で人のありようを見つめる視線を有しているようだ。

注

(1) 覚一本と呼ばれる諸本の中でも、当該章段の有無には揺れがある。櫻井陽子氏「覚一本平家物語の書写と本文——新出伝本の紹介から「小宰相」『宗論』の問題に及ぶ——」(駒澤國文53、二〇一六年二月)等参照。本稿では、日本古典文学大系『平家物語』による。同書は「小宰相身投」を持たない龍谷大学本を底本とするが、高野本によって補っている。その高野本にも、「以他本書入」との注記がある。

(2) 『軍記物語原論』第四章第二節(二〇〇八年、笠間書院。初出二〇〇三、二〇〇六年)。

- (3) 「小宰相身投」以外の章段も、引用は日本古典文学大系による。
- (4) 松尾氏注(2)論文。四部合戦状本には「日比は恥づかしかりしかば云はざりしかども、心弱気に云ひし時なれば知らせんとて」とあり、南都本にも類似の表現があることを見ても、首肯すべき読解と思われる。
- (5) 「心強し」との関連からなれそめ譚を読み解く論に、中田恵理子氏「すれ違う言葉の悲劇——「小宰相身投」における小宰相の入水——」(『画』6、二〇一二年十一月)、永井久美子氏「『平家物語』「小宰相身投」を読む——小宰相と通盛、その出会いの物語と『源氏物語』——」(『比較文学研究』101、二〇一六年六月)がある。永井氏は、「小宰相は「心強く」あつてはならないと女院から論され、通盛との結婚後は、みずからも「心強く」あるまいと努めた女性として描かれる」と指摘する。
- (6) なお、読み本系諸本は小宰相は通盛の妻ではなく妾であったとする記述を有するが、この点については本稿では言及しない。櫻井陽子氏「平家物語の小宰相」(『国語と国文学』、二〇一五年四月)参照。
- (7) 延慶本の引用は『校訂延慶本平家物語』(二〇〇〇～二〇〇九年、汲古書院)により、一部表記をあらためた。
- (8) 読み本系諸本それぞれの内容にも差違がある。後述するように延慶本と盛衰記のなれそめ譚にはある程度の共通性が見られるが、続く小宰相の苦悩の告白から入水までの本文は、延慶本と長門本(南都異本も)とが近似する。
- (9) 引用は『訓読四部合戦状本平家物語』(一九九五年、有精堂)による。
- (10) 引用は『南都本南都異本平家物語 下』(一九七二年、古典研究会)により、私に句読点を付した。
- (11) 引用は講談社学術文庫『源平闘諍録(下)』(二〇〇〇年、講談社)による。
- (12) 南都本は、なれそめ譚を後置する、読み本系の中では特殊な形。また、闘諍録はなれそめ譚を欠いている。いずれか一本のみを選んで古態と見なすことは難しい。
- (13) 本稿では他の語り本系諸本には触れないが、それらの中でも高野本の表現がすぐれているように思われる。
- (14) 『平家物語論究』第三一五(一九八五年、明治書院)。
- (15) 引用は、『源平盛衰記(七)』(二〇一五年、三弥井書店)による。
- (16) 松尾氏注(14)論文。
- (17) 松尾氏注(14)論文。
- (18) この点は南都本に近い。南都本には「甲斐ナキ命長ヘテ、イツマテトテカ歎クヘキナレハ、只水ノ底ヘモ沈ミナハヤト思ナリ」とある。

【付記】本稿は、JSPS 科研費(16K16759)による成果の一部である。